

「信ちゃん、信介ちゃん、うち是一人になりました。明日は小倉の夜の蝶」。カラオケでこの歌を唄うとわたしはわけもなく泣ける。予告もなしに転校して行った美少女を思い出すからか。

わたしの家の向かいの山には日本家園がある。まだ川崎市が景気がよかったころ、日本中の古民家を集めて集落をつくった。どの古民家も壮観である。冊子からあちこちの地方の言葉や歌が聞こえてきそうである。

湯舟でも故郷の人と風景を想い、湯上がりはチワワのナナしやんを膝に乗せて酒になる。芋焼酎のお湯割りである。酔いが回ると無性に人が恋しくなる。携帯電話になってからは便利になった。すぐに電話ができる。電話は癖になる。ただ、嫌いな

る。一日中だれとも口も聞かず、一人黙々と物を書くしかないからである。これはメールになっても同じである。ただ、メールは誤解も生む。心情が伝わらない。昨年、東京オリンピック時代の「姉しゃま」の想を練り、書いたら北区十条でいいじゃない。おまえ、どこの生まれ

# 酒に酔い人恋しく

人には電話はしない。好きな人だけである。同級生でもそうである。これといった話題もないわけだから、迷惑な電話である。なによりも迷惑しているのは和子姉さんかもしれない。家内も電話代が高過ぎると迷惑そうである。電話魔の同業者は多いと聞く。取材も含む電話である。

女優からも頼まれる。「松浦志佐がいいよ」「なんですか、それ」「俺の故郷の松浦市志佐町だよ」。この女優は、女優を廃業して結婚した。わたしのチームの男優と結婚して、男優の故郷で暮らしている。日舞を教えたり、村祭りで踊ったりとそれなりに楽しい暮らしらしい。それはそれでいい。嫁の代わりはそうそうはいないかもしれないが、女優の代わりはいくらでもある。この前はわたしの舞台を見た帰りの飲み会で「カムバックしたい」と漏らしていた。「甘くみてはいけませんよ。周りが承知するわけがないじゃないか」と諭した。その男優だった男には年若い母親がいる。わたしはその母親に会っていた。チームの連中もそう簡単には承知はずまい。



おかへ。こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹」で岸田戯曲賞を、89年に「重世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)